日本精機宝石工業株式会社

令和２年度ひょうごオンリーワン企業 認定企業

日本精機宝石工業株式会社

取締役社長　**仲川　幸宏** 氏

『「おもてなし」の様なモノづくり』で、レコード針業界に新たな風を吹き込んでいく！

―「ひょうごオンリーワン企業」に認定された感想をお聞かせください。

今回「ひょうごオンリーワン企業」に選定いただいた理由ですが、レコードの交換針を作っている企業自体が日本中でも珍しいという点と、立地の面で兵庫県の北部でモノづくりを続けているという点で、独自性を認めていただいたと考えており、光栄に感じています。

今回の認定を受けて期待していることとして、我々が行っている事業は作り手が非常に重要になる分野ですので、まずは兵庫県北部の新温泉町という地で、工業製品を作っているということを皆様に知っていただきたいです。そして若い方々に少しでも興味を持っていただき、一緒にモノづくりをしてみたいと思っていただいて、門を叩いていただけるととても嬉しく思います。

PROFILE

1965 年大阪市出身。近畿大学を卒業後、証券会社にて 2 年程勤務した後、1990 年日本精機宝石工業株式会社に営業職として入社。2020 年取締役社長に就任し、現在に至る。趣味・休日は、主にレコード鑑賞を楽しんでいる。

―御社の事業について、教えてください。

弊社は「レコード針」の製造・販売を中心に展開しており、今ではレコード針製造で培った技術をもとに「コンタクトゲージ・ドレッサ」「レンズクリーナー」「ダイヤモンドバー」と、大きく４つの事業分野に取り組んでいます。現在はそれぞれの事業分野で、2～3 割ずつの売上を構成しています。

本社外観

―美方郡新温泉町という地で事業を始められたきっかけを教えてください。

兵庫県の北部の地域は昔から漁業が盛んだったのですが、特に冬場になると雪に閉ざされ、強風で波が高く、漁に出られない状況となるため、非常に貧しい地域でした。ある時、

この地域に住んでいたお医者さんが医学を学ぶために長崎に留学に行った際、限られた空間の中でも製造が可能な縫い針づくりの様子に着目し、製造技術を持って帰ってきたことがきっかけとなり、この浜坂の地に縫い針づくりが浸透していきました。弊社の始まりもその縫い針づくりを始めた家の 1 つでした。その縫い針づくりで身につけた技術が、レコード針の製造に繋がっています。

―オリジナル技術を生み出すために取り組まれていることについて教えてください。

弊社が扱っている 4 つの事業分野は、全く異なったものなので、小さな会社が 4 つ集まっているようなイメージになっています。新たに入ってきた人には各部門を回っていただいて、適応性を見ながら適材適所に人を配置するようにしています。全く違う分野をやっていると、どうしても自分の部門のみに偏った視点に陥りがちになってしまうため、人を比較的流動的に動かして、部門間で垣根を作らせないような雰囲気作りには力を入れています。せっかく皆で1つの会社でやっているということを意識してもらうために、横との連携を重要視しています。

―品質だけではなく、「おもてなし」の様なモノづくりにこだわられているとお聞きしました。

品質については、数年前に ISO の品質マネジメントシステムを導入しましたが、今は自分たち独自で社内の品質マネジメントシステムを運用しています。

我々のモノづくりには、品質という言葉では言い表せない『細部にまで心配りが行き届いた、「おもてなし」の様なモノづくり』を大切にしてきました。従業員は皆このことを意識して製品作りに励んでくれています。その中でも特に女性の工員さんの心配りには素晴らしいものがあります。

弊社には女性の工員さんも多くいらっしゃるのですが、女性ならではの感覚・感性をもって、目に見えない、肌に触れないような細部にまで気を配ったモノづくりを行ってくれています。そのような心配りこそが、我々が大切にしている『細部にまで心配りが行き届いた、「おもてなし」の様なモノづくり』という考えを支えてくれています。弊社は昔からそのようなモノづくりを大切にしてきており、作り手をリスペクトしています。私の想いとしては、社長の代わりはいくらでもいますが、弊社には職人さんといわれる何十年と勤めていただいている方々もたくさんいらっしゃいます。その人たちの代えは絶対に効きません。

レコード針製作の様子

―感度を高めるために気を付けていることを教えてください。

日頃から音をたくさん聞くことを意識しています。普通、音楽というものはリラックスしながら聞くものだと思いますが、仕事となると気を張って聞き分けようとするので、音を聴くことにすごく疲れてしまいます。そうなると匂いと同じように、だんだんとわからなくなってきてしまうので、日頃からいろいろなジャンルの音を聞いて、聞き分ける力を養うようにしています。

もう一つ気を付けていることとして、モスキートーンを月に 1 度必ず聞くようにしています。歳をとると、だんだんと高音が聞こえなくなっていきます。これはどうしようもないことですが、自分の限界を知っておくということは必要なことなので、月に 1 度は必ず自分の聞き分けられる限界を確かめるようにしています。

種類豊富なダイヤモンドバー

―今後の展望をお聞かせください。

今後の取り組みとしては、ダイヤモンドの研磨技術を向上させていきたいと考えています。今まではお客様の方から図面でオーダーをいただいて、それを作れるか作れないかだったのですが、私が考えているのはその逆で、自分たちで研磨できる範囲を高め、把握した上で、お客様の方に自分たちの技術を提案していけるようにしていきたいと考えています。

生産拠点については、現在はこの新温泉町という土地で全て製造していますが、今後について何か具体的に決まっていることがあるわけではないですが、ダイヤモンド製品等については、別の拠点に移すという可能性はあるかもしれません。しかし、レコード針の製造については、創業からずっとこの土地で作り続けてきたものですし、この地域にもっと貢献し、恩返しをしていきたいという想いもありますので、ずっとこの土地で作り続けたいと思っています。

―「オンリーワン企業」をめざす企業へのメッセージをお願いします。

兵庫県の中でも、播磨地方の工業地帯は造船技術等で技術力はあるはずですが、造船分野では長崎や広島が有名であったり、技術力はあるが知名度が伴っていないように思います。そのような中でクローズアップしてもらうためには、今やっていることに対して少し視点を変えてみるだけでも、オンリーワンに繋がるものはたくさんあると思っています。我々のレコード針の事業でも、カンチレバーの材質を少し変えてみるだけでも注目されるように、オンリーワンのものをゼロから作ろうと躍起になるのではなく、今あるものの中でも少し視点を変えてみるとオンリーワンのものが見えてくると私は思っています。

日本のモノづくりは「made in Japan」として、世界からも長きにわたって注目されてきた存在だと思っています。そこに「made in Japan」だけではなく、例えばですが「made in Hyogo」のように、兵庫県のモノづくりはすごいと、日本中、世界中から思ってもらえるような存在にしていきたいと考えています。

TECHNOLOGY

全ての事業の根底にある「レコード針」の開発

「レコード針」については、需要が少なく、事業を撤退することも検討していたのですが、昨今のアナログブームとコロナ禍でのステイホームの影響もあり、日本だけではなく、ヨーロッパやアメリカでもレコードの需要が高まってきています。

ただ、製品の性質上、大量生産が難しく、顕微鏡とピンセットを使いながら１つ１つ丁寧に製造していく必要があるため、一生懸命ご期待にお応えすべく製造していっているところです。

開発に至った経緯

創業当時の縫い針製造については、時代の流れとともに工場での大量生産が主となり、この地域での縫い針製造も衰退していきました。弊社も縫い針製造から撤退することを余儀なくされたのですが、「せっかく身に着けた針製造の技術を捨てるのはもったいない」という想いから、次に蓄音機の針の製造を開始したことがきっかけとなり、現在のステレオのレコード針の総合生産に繋がっています。

独自性

レコード針の製造にあたっては、製品の種類によって、それに合わせた治工具を使用するのですが、我々はその治工具自体も自分たちの手で設計・製造しています。そこには治工具を作った人たちの設計思想が入っており、いかに使いやすくするかという観点で、治工具自体も改良していっています。
その治工具を使えば、誰でも一定のクオリティのものが作れるということが会社にとっては極めて重要であり、弊社の強みだと思っています。そのため治工具については独自性の塊であり、門外不出で絶対に見せることができない部分です。

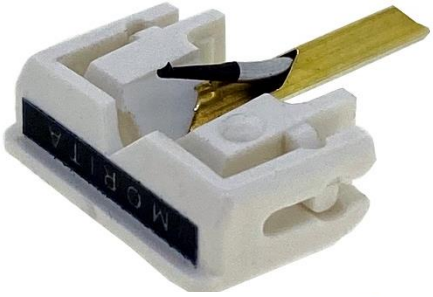
今後の展望

「レコード針」事業の展望については、2 つ考えています。1 つ目はサードパーティーのレコード針メーカーからの脱却です。アメリカの大手音響機器メーカーであるシュア社がレコード針と針を受ける側のカートリッジの生産中止を発表したこともあり、弊社としては今まで製造してきたレコード針と合わせてカートリッジもセットで製造していこうとしています。
2 つ目はレコード針のカンチレバーの材質変更です。現在はアルミニウムがメインで使用されていますが、その材質を変えることで音が全く違ってきます。レコード・曲に合わせて材質も変えて楽しむことを提案しています。

TOPICS

「MORITA」のカンチレバーで、今までとは一味違う音を提案しています。

弊社はカンチレバーに業界初の木材を使用した「MORITA」ブランドを展開しています。第一弾は黒柿を使用したカンチレバー、2020 年に第 2 弾として鎌柄(別名:ウシコロシ)を使用したカンチレバーを発売しています。
嗜好に合わせてレコード針を変えるという業界の新たな常識を提案しています。



沿革

1873 年　「仲川製針工場」として縫い針製造を創業
1949 年　蓄音機用鋼鉄針の製造・販売を開始
1959 年　業務拡大に伴い法人組織に転換「日本精機宝石工業株式会社」設立
1966 年　宝石レコード針の総合生産を開始
1973 年　ゲージコンタクト（測定子）の設計・製造を開始
1978 年　医療用具・歯科用ダイヤモンドバーを開発
1981 年　厚生省（現厚生労働省）より「医療用具製造」許可工場の指定を受ける
1990 年　CD ピックアップレンズクリーナー開発
1993 年　ダイヤモンド・ドレッサーの設計・製造を開始
2005 年　兵庫県「元気企業」(中小企業支援ネットひょうご)の認定を受ける
2010 年　ドライブ・フレッシャーを開発し製造、販売開始
2011 年　「2011KANSAI モノ作り元気企業 100 社（基盤技術編)」に選定される
2017 年　経済産業省「地域未来牽引企業」に選定される
2020 年　ひょうごオンリーワン企業認定

会社概要

所在地　〒669-6701　兵庫県美方郡新温泉町芦屋 100 番地
電話　0796-82-3171（代表）
FAX　0796-82-4110
URL　http://www.jico.co.jp

従業員数　54 名(2021 年 4 月現在)
資本金　2,000 万円
設立　1959 年 10 月
代表取締役　仲川 和志

事業概要

「レコード針」「コンタクトゲージ・ドレッサ」「レンズクリーナー」「ダイヤモンドバー」の製造・販売